同族目的語構文における動詞
―動詞アスペクトの再解釈について―

林　高宣*

Takanori HAYASHI

Verbs in the Cognate Object Construction: Construability of Verb Aspect

【キーワード：アスペクト，構文文法，同族目的語】

1．はじめに

これまでの同族目的語構文（cognate object construction）に関する研究では、目的語の解釈に対して大きく３つの立場がとられてきた。目的語を項（argument）と解釈する立場（Massam 1990, Hale & Keyser 1997, Pham 1998）、目的語を付加詞（adjunct）と解釈する立場（Mittwoch 1998）、その両方の場合を認める立場（Nakajima 2006, Kitahara *et al.* 2005）である。本稿では、これらのうち第３の立場をとりつつ、①同族目的語構文に現れる動詞の範疇（自動詞か他動詞か）②同族目的語構文に特有な意味論的解釈、すなわち構文の意味の影響を受けて動詞の表わす事態が再解釈されることについて北原（2011）を参考に構文文法の立場から見ていきたい。

2．同族目的語構文における非能格性制約

Levin and Rappaport Hovav（1995）によれば、同族目的語構文には、非能格動詞（unergative verb）のみが現れ、非対格動詞（unaccusative verb）は現れない。非能格動詞とそれに対する非対格動詞の分類は概略、以下のようになる。

（1）非能格動詞
　a．事象に対し意図的に関わる行為者を主語とする自動詞（play, speak, shout, swim, work）
　b．非意図的な生理現象を表し、経験者を主語とする自動詞（cough, belch, hiccough, sneeze, vomit）

（2）非対格動詞
　a．意図を持たず受動的に事象に関わる対象（受動者）を主語とする自動詞（burn, die, drop, roll, tremble）
　b．存在や出現を表す自動詞（exist, hang, remain, happen, occur）
　c．アスペクト動詞（begin, continue, end, start, stop）

例えば、事象に対し意図的に関わる行為者を主語とする自動詞grin, smile, sighや経験者を主語にとる非意図的な生理現象を表す自動詞sleepには次のような同族目的語構文が見られる。

（3）a．Bob grinned a sideways grin.
（高見・久野2002: 133）
　b．Sue slept a sound sleep.
　c．Malinda smiled her most enigmatic smile.
（Levin and Rappaport Hovav 1995: 40）
　d．Bill sighed a weary sigh.　（Jones 1988: 89）

反対に、意図を持たず受動的に事象に関わる対象（受動者）を主語にとる（4a）（4b）（4c）や存在や出現を表す自動詞を含む（4d）（4e）は非文法的である。

（4）a．*The glass broke a crooked break.
（Levin and Rappaport Hovav 1995: 40）
　b．*The ship sank a strange sinking.
（Keyser and Roeper 1984: 404）
　c．*The snow melted a slow melt.
（Macfarland 1995: 198）
　d．*Karen appeared a striking appearance at the department party.
（Levin and Pappaport Hovav 1995: 150）
　e．*Phyllis existed a peaceful existence.　（*Ibid.*）

このように同族目的語構文に非能格動詞しか現れないとされる現象は、一般的に同族目的語構文における非能格性制約として知られている。

これに対し、高見・久野（2002）は非対格動詞が同族目的語構文に現れるものとして次の例をあげている。

（5）a．Mark Twain died a gruesome death.
　b．The general died the death of a hero.
　c．No one wants to die a horrible death.
（高見・久野 2002: 140）

（5）における動詞dieは意図を持たず受動的に事象に関わる対象（受動者）を主語にとる非対格動詞である。また、（6）における動詞も対象を主語とする非意図的な事象を表している。

（6）a．The tree grew a century's growth within only ten years.
　b．The stock market dropped its largest drop in three years today.

*　島根大学教育学部言語文化教育講座

c. Stanley watched as the ball bounced a funny little bounce right into the shortstop's glove.
d. The apples fell just a short fall to the lower deck, and so were not too badly bruised.
（高見・久野 2002: 142）

（6a）の動詞growは対象を主語とする非対格動詞であり、（6c）のボールが弾みながら転がるという事態や（6d）のリンゴが落ちるという事態もすべて非意図的な事象である。これらの例は同族目的語構文に対する非能格性制約が正しくないことを示している。

3．Nakajima（2006）

このように非対格動詞が同族目的語構文に生起する現象に対し、Nakajima（2006）は（6）における同族目的語は純粋に名詞としての目的語というより副詞的同族目的語であると主張する。[1] 例えば、（7）の同族目的語構文には（7a）（7b）（7c）の解釈が可能である。

（7）Mary danced a beautiful dance.
a. メアリーの踊りぶりが優美であった。
b. メアリーの踊りが優雅な結果となった。
c. メアリーの踊った舞踊の種類が優美なもの（例えばワルツ）であった。
（中島・池内 2005: 183, 北原 2011: 65）

（7a）の解釈はいかに踊ったかということを述べるものであり、いわば同族目的語内の形容詞が様態副詞beautifullyと同じ働きをしていると考えられる。（7b）は踊りを全体的にとらえ、結果的にいかなる踊りとなったかについて述べている。最後に（7c）は、同族目的語の部分をwaltz, tangoなどの具体的な踊りの種類と見なす解釈である。（7a）（7b）の解釈では同族目的語は副詞的同族目的語として機能し、（7c）では名詞的同族目的語として機能していると解釈するわけである。

以上からNakajimaは非対格動詞の同族目的語が（7b）と同様に文中で副詞としての機能を担っていると考え、それらの目的語が副詞であることを示すため次の議論を展開する。（6）の同族目的語はすべて結果の程度を表している。その結果、（8）のように結果の程度を表す、同族目的語とは直接関係ない表現に書き換えられたり、（9）のようにhowを用いた疑問文で用いられる。

（8）a. The tree trunk grew by a century's expansion in only ten years.
b. The stock market dropped by 250 points today.
c. The ball bounced with a funny little curve right into the shortstop's glove.
d. The apples fell {by/to} the length of my arm.
（Nakajima 2006: 676）

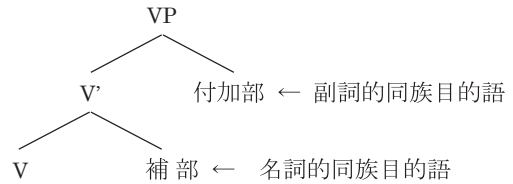
（9）a. {How much/How far/*What kind of growth} did the tree grow in ten years?
b. {How much/How far/*What kind of drop} did the stock market drop today?
c. {How much/How far/*What kind of fall} did the apples fall to the lower deck?
（Nakajima 2006: 677）

（9）においてwhatを用いた疑問文が不適格である理由は、同族目的語が名詞的同族目的語でないためである。また、これらの同族目的語は本来名詞ではないため、（10）のように受動文の主語になれない。

（10）a. *A century's growth was grown within only ten years by the tree trunk.
b. *The largest drop in three years was dropped by the stock market today.
c. *A funny little bounce was bounced right into the shortstop's glove by the ball.
d. *Just a short fall was fallen to the lower deck by the apples. （*Ibid.*）

Nakajimaは、これらの現象から非対格動詞の同族目的語は副詞的同族目的語であると主張し、以下のような統語構造を仮定している。

（11）



（中島・池内 2005: 185）

非対格動詞が同族目的語をとる場合、それは統語構造の付加部に仮定され、非能格動詞が同族目的語をとれば、補部に仮定されることになる。

Nakajimaの主張に従えば、動詞dieと共起する同族目的語は副詞的同族目的語であるということになる。北原（2011）は同族目的語構文に動詞dieが生じる場合を中心に議論を展開しており、（12）における同族目的語構文が（12a）のように様態副詞によって書き換えられたり、同族目的語が（12b）のように受動文の主語になれないことを認めつつ、Nakajimaの主張に反する（13）のような例が見られることも指摘している。

（12）John died a gruesome death.
a. John died gruesomely. （Jones 1988: 93）
b. *A gruesome death was died by John.
（Jones 1988: 91）

（13）a. This clause puts as plainly as it can be put the idea that His death was equivalent to the death of all; in other words, it was the death of all men which was died by Him. Were this not so, His death would be nothing to them. It is beside the mark to say, as Mr. Lidgett does, that His death is died by them rather than theirs by Him; the very point of the apostle's argument may be said to be that in order that they may die His death He must first die theirs.
b. His death can put the constraint of love upon all men, only when it is thus judged that the

death of all was died by Him.

(James Denny, *The Death of Christ: Its Place and Interpretation in the New Testament*)

c. But the one true R'n'R death was died by the one true original R'n'R star, Elvis, who died on the lavatory of what boiled down to a lethal dose of constipation.

(Höche 2009: 161)

(13) は北原が引用している例であるが、いずれにおいても動詞dieの同族目的語が受動文の主語となっている。これはNakajimaの主張に反し、非対格動詞の同族目的語に名詞的同族目的語が存在していることを示している。

4. 自動詞と他動詞

同族目的語構文の特徴を自動詞・他動詞という観点から分析した研究として高見・久野 (2002) がある。高見・久野は、同族目的語構文とは何かという問題から出発し、これまで考えられてきた動詞の自他の見直しを行い、最終的に自動詞が同族目的語をとる場合がまさに同族目的語構文であり、他動詞が同族の目的語をとっていても、それを同族目的語構文とは考えていない。[2] 以下、高見・久野に従って動詞の自他の見直しと彼らの分析を見てみよう。

高見・久野 (2002) によれば、同族目的語構文とは、本来目的語をとるはずのない自動詞が同族の目的語に限ってそれを目的語とする構文である。動詞sing, danceは同族目的語をとる場合もあるが、(14) に見られるようにそれ以外の目的語をとる場合もあるので、他動詞と考えられる。

(14) a. John sang a lullaby/the part of Carmen.
b. Mary danced a jig/a piece from Swan Lake.

(高見・久野 2002: 143)

一方、(15) のようにこれまで一般的には自動詞と考えられてきた動詞が、実は他動詞として機能していると高見・久野は述べている。

(15) a. My grandfather lived a happy life.
b. John jumped a mighty jump.
c. The athlete ran a good run.

(高見・久野 2002: 135)

高見・久野が動詞の自他を判定する基準は、①同族目的語と見なされる目的語が代名詞itに置き換えられるか、②同族目的語と見なされる目的語が修飾要素を必要とするか、という2点である。これらについて以下に見てみよう。

高見・久野 (2002) によれば、同族目的語をとる動詞が他動詞の場合、同族目的語を代名詞itで置き換えることができる。

(16) a. He laughed a hearty laugh. *He laughed it because he was truly amused by her joke.
b. He was horrified, but he smiled a happy smile. *He smiled it in order to disarm the intruder.
c. He died a terrible, lingering death. *There was no reason for him to die it with all the powerful painkillers we have nowadays.

(高見・久野 2002: 148)

(17) a. John sang a beautiful song. He sang it to cheer her up.
b. Mary danced an exotic dance. She danced it to show us her experiences in Asian countries. (*Ibid.*)

(16) における動詞laugh, smile, dieの目的語を代名詞itで置き換えることができないのに対し、(17) における動詞sing, danceの場合は目的語をitで置き換えることができるため、前者は自動詞であり、後者は他動詞であると高見・久野は述べている。

さらに、同族目的語をとる動詞live, jump, run, fight, dreamの場合も (17) と同様に目的語を代名詞itで置き換えることができ、これらについても他動詞であると述べている。

(18) a. He lived a happy trouble-free life. He could live it because his wife took care of all the difficulties.
b. John jumped a tremendous 15-foot jump in the Olympic Games. He jumped it with such grace that I felt for a moment as if I had been watching a well-choreographed ballet scene.
c. Mike ran his second run of the day along the Esplanade. He ran it in ten minutes, breaking his previous record by 10 seconds.

(高見・久野 2002: 149)

d. They fought a clean fight. They fought it that way to prove to all and sundry that they were men of honor.
e. I dreamed a horrible dream last night. I probably dreamed it because I saw a very strange movie the day before yesterday.

(高見・久野 2002: 150)

次に同族目的語が修飾要素をとるか否かという点について見てみよう。自動詞とされる動詞が必ず目的語に修飾要素をとる必要があるのに対し、他動詞では修飾要素をとる動詞とそうでない動詞が見られると高見・久野は述べている。

(19) a. We don't live life forever.

(Macfarland 1995: 89)

b. I dreamed a dream last night.

(高見・久野 2002: 151)

(20) a. *John jumped a jump in the Olympic Games.
b. *They fought a fight last night.
c. *Mike ran a run along the Esplanade. (*Ibid.*)

(19) が示すように動詞live, dreamは目的語に修飾要素がない場合でも適格であるが、(20) のように動詞jump,

fight, runでは目的語に修飾要素がない場合、不適格となる。

以上から同族目的語をとる動詞は他動詞から自動詞へ、これらの2点に関して連続体をなしていると説明する。

(21)

	他動詞			自動詞
	sing, dance	live, dream	jump, fight, run	laugh, smile
目的に代名詞 it をとれる	○	○	○	×
同族目的語に修飾要素を必要としない	○	○	×	×

同族目的語と見なされる目的語が代名詞itに置き換えられる動詞は他動詞であり、そうでない動詞は自動詞である。さらに、同族目的語と見なされる目的語が修飾要素を必要とする動詞は自動詞であり、他動詞では修飾要素を必要とする場合とそうでない場合がある。つまり、同族目的語を代名詞 it に置き換えることができず、かつ同族目的語に修飾要素を必要とする動詞のみが自動詞であり、この動詞が同族目的語をとる構文のみが同族目的語構文であるということになる。

これらの観察を踏まえて久野・高見はさらに同族目的語について分析を行っている。

(22) a. *Mary laughed a sad smile at the meeting.
b. *He laughed a cynical grin.
c. *The dog howled fierce barks.
d. *Ellen sneezed a dry cough.
(高見・久野 2002: 144)
e. ?*He smiled a silly grin. (Massam 1990: 165)

(22) の例はいずれも自動詞とされる動詞が目的語をとっているが、目的語が同族でないと判断されるため不適格である。しかし、一見したところでは (22) と同様に不適格と判断されそうであるにもかかわらず、適格な例がある。

(23) a. He slept a fitful slumber. (Horita 1996: 241)
b. Van Aldin laughed a quiet little cackle of amusement. (大室 1990: 76)

(23a) では動詞sleepが目的語の主要部名詞に同族でないかに見える名詞slumberをとり、(23b) では動詞laughが同様に同族でないと思われる名詞cackleをとっている。

高見・久野は、(22) が不適格であるのに対し、(23) が適格である理由を、適格文では同族目的語の表す動作の様態が、動詞の表す動作のサブセットになっていることを指摘している。(23a) では目的語slumberが動詞sleepの表す動作の様態となっている。(23b) でも、目的語の主要部名詞cackle (かん高い笑い声) がlaughの特別な場合であると考えられ、目的語が示す動作の様態が動詞laughの表す動作の様態のサブセットになっている。

これに対し、(22a) (22b) では目的語の主要部名詞smile, grinが「声を出さないにっこりとした微笑」「声を出さないにやりとした笑い」であるのに対し、動詞laughは「声を出して笑う」ことを意味する。その結果、例えば (22a) では目的語a sad smileの表す動作の様態が動詞laughの表す動作の様態のサブセットになっていない。(22c) では犬が吠えるbarkは、遠吠えするhowlとは異なることを表し、目的語が表す動作の様態は動詞の表す動作のサブセットにはならない。(22d) でも、咳をすることはくしゃみをすることとは異なるため、前者は後者のサブセットとは考えられない。(22e) では名詞grinは「声を出さないにやりとした笑い」を意味し、動詞smileの表す内容と同じであるかに思える。しかし、目的語はa silly grinであり、これは好意を表す微笑の様態のサブセットとは考えられないため不適格となる。

以上から高見・久野 (2002: 146) は次のような仮説を立てている。

(24) 同族目的語構文に課される機能的制約：同族目的語構文においては、同族目的語 (名詞句全体) が示唆する動作の様態が、動詞が表わす動作の様態のサブセットでなければならない。

(24) は (23) が適格であることや (22) が不適格であることを説明していると思われる。

しかし、同族目的語構文を自動詞が同族の目的語をとる場合に限定することは問題を生じさせる可能性がある。動詞を自他に区別して、同族目的語構文を自動詞をとる場合に限定すれば、動詞の性質から同族目的語構文の目的語はNakajimaが主張する副詞的同族目的語ということになるからである。この分析では非対格動詞dieの同族目的語が受動文の主語になることが説明できなくなる。また、高見・久野はその理由を述べていないが、動詞の自他を区別する②同族目的語と見なされる目的語は修飾要素を必要とするという特徴が、なぜ自動詞であることを保証することになるのか説明できない。[3] 可能な解釈は、同族目的語が修飾要素をとることにより動詞の表す動作の様態を表していると考えることであろう。つまり、同族目的語が修飾要素をとる場合、それは副詞的同族目的語として機能しており、このような目的語をとる動詞が自動詞であるという高見・久野の主張を支持することになるかもしれない。しかし、この場合も裏を返せば、同族目的語は副詞的同族目的語であるということになり、同族目的語を受動文の主語にできないことを意味する結果となる。

北原 (2006: 54-55) は高見・久野が自動詞とした動詞でさえ、(25a) に見られるように受動化を許し、(25b) のように同族目的語が指示代名詞itによって置き換えられることを指摘している。

(25) a. Marilyn Monroe's smile was smiled by Mary.
(Kitahara *et al.* 2005: 137)
b. Mary smiled Marilyn Monroe's smile. Nancy smiled it, too. (Kitahara *et al.* 2005: 138)

同族目的語をとる動詞を自動詞とする高見・久野の分析

では、これらの例をいかに説明することになるのか不明である。

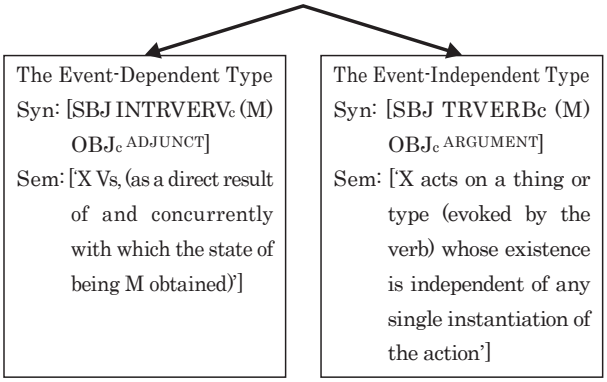
5．名詞的同族目的語

以上の高見・久野の主張に従えば、非対格動詞を含む同族目的語構文の目的語はNakajim（2006）の主張と同様に副詞的同族目的語であるということになるかもしれない。しかし、実際には北原（2011）が指摘するように、受動化を受ける（13）のような名詞的同族目的語も存在している。

北原（2011: 70）は、動詞dieについて中心的に議論を進めているが、同族目的語を副詞的同族目的語とする分析には問題があると指摘し、動詞が他動詞として機能するか、自動詞として機能するか（同族目的語が名詞的同族目的語であるか、副詞的同族目的語であるか）は構文指定であるという構文文法の立場をとっている。つまり、同族目的語構文が名詞的同族目的語をとっていれば、動詞は他動詞であり、副詞的同族目的語をとっていれば、自動詞であるということになる。

実際に（13）（25）のような例が見られるため、先行研究のように一律に非対格動詞をとる同族目的語構文の動詞を自動詞であるとみなすことはできない。同族目的語構文には2種類があることを認めた上で、さらに両者の関係はいかなるものであるかといった点も構文文法の立場から説明される。構文文法では、構文をスキーマとして捉え、2つの構文のあいだに上位スキーマが抽出される場合、両者は同じ構文として認可されることになる。北原（2011: 73）は2種類の同族目的語構文に対して次のようなスキーマを提示している。

（26）COGNATE OBJECT CONSTRUCTION



このように名詞的同族目的語を含む構文と副詞的同族目的語を含む構文が同族目的語構文という上位スキーマとネットワークを形成すると考えることで、実際に（13）（25）のような例が見られることが説明され、同族目的語に含まれる動詞の自他の決定も構文指定であると仮定する方が言語的経済性の観点から妥当であると言える。

以上のように名詞的同族目的語の存在を仮定することは当然であると思われるが、名詞的同族目的語が認められるのはいかなる場合であろうか。目的語によって表される内容は、動詞句が表す事態によって異なってくる。具体的には、動詞による動作によって結果的に産出されるものと産出の過程とは独立して存在するものの2つがある。Langacker（1991）が指摘するように、前者では受動化が容認されず、後者では容認される。

（27）a．?*A blood-curdling scream was screamed by one of the campers.
b．The blood-curdling scream that they had all heard in countless horror movies was screamed by one of the campers.　（Langacker 1991: 363）

Langackerの説明では、前者に対して同族目的語（cognate object）という術語が用いられ、通常それが産出されるプロセスの期間にのみ存在し、それ以降は存在しない。当然、誰かの叫び声は叫んでいる間にのみ存在し、それ以降は存在しないはずである。一方、後者に対しては結果の目的語（effected object）という術語が用いられており、例えばbuild a house, knit a sweaterなどが表す事態のように、それらが産出される期間の後でも作り出された物が存在している。（27a）における叫び声は叫んでいる瞬間にしか存在しないが、（27b）での叫び声はホラー映画で耳にする叫び声であり、一般的な概念として存在している。[4] この場合には受動化が許される。ここから（26）に示されるように副詞的同族目的語は事象を表す場合であり、名詞的同族目的語は事象から独立した概念を表す場合であると考えられる。

6．動詞アスペクトの再解釈

最後に本来、同族目的語構文に現れることができない到達動詞dieが同族目的語構文に現れる理由について考えてみたい。

高見・久野（2002: 157-158）は同族目的語構文に到達動詞が生起できない理由として、同族目的語構文は、ある程度の時間的経過を伴なう事態が最終結果に至ったことを表しているのに対し、到達動詞は最終結果に至る過程を表していないからであると述べている。

（28）a．*The glass broke a crooked break.
b．*The actress fainted a feigned faint.
（Levin and Rappaport Hovav 1995: 40）
c．*She arrived a glamorous arrival.
（Levin and Rappaport Hovav 1995: 148）
d．*Karen appeared a striking appearance at the department party.
（Keyser and Roeper 1984: 404）
e．*The accident occurred a sudden occurrence.
（高見・久野 2002: 157）

これらの例では動詞句が結果を表しており、結果に至る過程を示していない。[5]

到達動詞が同族目的語構文に現れないことは到達動詞であるdieが同族目的語構文に現れるという（29）（=（5））の事実と矛盾する。

（29）a．Mark Twain died a gruesome death.
b．The general died the death of a hero.

c．No one wants to die a horrible death.
（高見・久野2002: 140）

高見・久野（2002: 159）は‘to die a（special）death’における名詞deathが古英語では具格であり、中英語ではdeathの前に様々な前置詞が置かれ、現代英語になって初めて同族目的語となった歴史的変遷についてふれ、これらの構文は死んだ結果として生じるものではなく、その様態を説明していると述べている。[6]

これに対し、北原は動詞dieの語彙的意味からdieが同族目的語をとることができることを説明する。dieは到達動詞であり、ある一時点を境界として命のある状態とない状態が切り替わることになる。しかし、北原（2011: 74）の指摘によれば、dieは死に至るまでのプロセスに焦点が置かれている。

（30）a．She died young/happy/poor.（北原 2011: 74）
b．You're going to get out of this... you're going to go on and you're going to make babies and watch them grow and you're going to die an old lady, warm in your bed. Not here. Not this night. Do you understand me?
（James Cameron, *Titanic*）

北原は（30a）の場合、「若くして、幸せに、貧しいまま」といった死に至るまでのプロセスが問題となると述べている。（30b）は映画「タイタニック」で死に瀕しているヒロインへ向けられた発話である。die an old lady, warm in your bedは「年をとって、暖かいベッドの上で死ぬんだよ」という意味であると解釈される。このように死という現象自体は点的な事態でありながら、これらの例では死に至るまでのプロセスが示されており、動詞dieが様態を表す同族目的語をとりやすい語彙的意味を有していると説明する。

さらに、動詞dieが表す事態は意思でコントロールできないため、非対格動詞として分析されてきたが、北原（2011: 75）は動詞dieに自分の意志でコントロールできる例があると述べている。

（31）a．memory of those who died for independence
b．The shrine honors those who died fighting for Japan, including several men who were convicted of war crimes for their actions in World War II.（EIJIRO on the WEB）

（31a）では独立のために、（31b）では日本のために自ら死を選んだという意志を読み取ることができる。これらの事実も、dieが同族目的語をとりやすくなる性格を備えていることをうかがわせる。[7]

これらの例では到達動詞としての動詞dieのアスペクトが文脈とともに同族目的語構文のスキーマの影響を受けて再解釈されていると考えられる。Leech（2004[3]: 24）は、動詞dieの進行形について単純形から進行形へと形態が変化することにより、死の瞬間を指していた動詞dieの意味が死への推移を表すように変わり、動詞の異なる意味側面が機能し始めていると述べている。 進行形の場合、進行相というアスペクトの要請によって意味の再解釈がなされており、（13）（30）の場合は文脈と同族目的語構文のスキーマによって動詞dieのアスペクト再解釈がなされていると考えられる。

北原はこのような分析を語彙意味的分析と呼んでいるが、実際には動詞の意味さえも、その解釈を決定するのは構文であるという主張につながるのかもしれない。単独では通常、到達動詞と解釈される動詞dieも、（30）では構文と文脈によって死に至る前の過程が目的語の修飾要素によって表されるようになり、到達動詞を達成動詞として再解釈するプロセスが引き起こされている。つまり、自動詞構文は動詞dieに到達動詞としての意味を与え、同族目的語構文は動詞dieに達成動詞としての意味を与えていると結論される。このように考えれば、（28）が同族目的語構文として不適格である理由も、同族目的語の修飾要素から結果に至る過程を読み取ることができないからであると説明することができる。

7．おわりに

本稿では、同族目的語構文の動詞を自・他に区別して考えるより、同族目的語構文というスキーマによって動詞の範疇が決定されるという北原の主張を支持し、単独では通常、到達動詞と解釈される動詞dieも、同族目的語構文と文脈によって到達動詞を達成動詞として解釈するアスペクト再解釈のプロセスが引き起こされていることを述べた。つまり、自動詞構文は動詞dieに到達動詞としてのアスペクトを与え、同族目的語構文は動詞dieに到達動詞としてのアスペクトを与えていると結論される。

注

1）Nakajima（2006）では、名詞的目的語に対し項的目的語（argument-like/argumental object）という術語が用いられている。

2）高見・久野（2002）はこのような構文を他動詞構文と呼んでいる。

3）高見・久野によれば、同族目的語に修飾要素がある場合、（i）のように修飾表現が少ない例よりも（ii）のように修飾表現が豊富な例を適格性が高いと判断する話者が多いと述べている。

（i）a．Malinda smiled a thin smile.
b．Then curtsy your best curtsy and proceed down the receiving line.
（高見・久野 2002: 163）

（ii）a．Malinda smiled her most charming smile.
b．Then you must curtsy your most polished curtsy and proceed down the receiving line.（*Ibid.*）

その理由について目的語全体が表す動作の様態が動詞の表す動作の様態のサブセットになるという点を明確にしない限り、意味上の寄与がなく、単なる類

語反復（tautology）になり、冗長な表現になってしまうからであると述べている。

4）北原（2011）は、前者の構文スキーマを事象依存型（the event-dependent type）、後者の構文スキーマを事象独立型（the event-independent type）と呼んでいる。

5）状態動詞も同様に同族目的語構文には現れない。

（i）a．*Phyllis existed a peaceful existence.
（Levin and Rappaport Hovav 1995: 150）

b．*The city sprawled an extensive sprawl around the bay.

c．*The statue stood a heroic stance in the middle of the common.
（Levin and Rappaport Hovav 1995: 152）

これは状態が表す事態に結果が付随しないため当然である。

6）この考え方もこれらの同族目的語を副詞的同族目的語と見なすことにつながるかもしれない。

7）（13a）（13b）でもイエスは自らの意志で死を選び、全人類の身代わりとして死んだことを意味していると北原は説明している。

参考文献

Hale, K. and S. J. Keyser. 1997. On the Complex Nature of Simple Predicators. Alsina, A., Bresnan, J., and Sells P.（eds.）, *Complex Predicates*. Stanford: CSLI Publications. pp. 29-66.

Horita, Y. 1996. English Cognate Object Constructions and Their Transitivity. *English Linguistics* 13, pp. 221-247.

Höche, S. 2009. *Cognate Object Constructions in English: A Cognitive-Linguistic Account*. Tübingen: Gunter Narr Verlag Tübingen.

Jones, M. A. 1988. Cognate Objects and the Case-filter. *Journal of Linguistics* 24, pp. 89-110.

Keyser, S. and T. Roeper. 1984. On the Middle and Ergative Constructions in English. *Linguistic Inquiry* 15, pp. 381-416.

北原賢一. 2006. 現代英語における同族目的語構文の実態―構文文法的観点から―.『英語語法文法研究』第13号, pp. 51-65.

北原賢一. 2011. 動詞dieと同族目的語構文―語彙・構文的アプローチによる記述的考察―.『英語語法文法研究』第18号, pp. 63-78.

Kitahara, K., Kodaira, M., and T. Tamura. 2005. A Semantic Analysis of the Cognate Object Construction. *Tsukuba English Studies* 24, pp. 137-138.

Langacker, R. W. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar* Vol. II: *Descriptive Application*. Stanford: Stanford University Press.

Leech, G. N. 2004[3]. *Meaning and the English Verb*. London: Longman.

Levin, B. and M. R. Hovav 1995. *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface*. Cambridge, Mass.: MIT Press.

Macfarland, T. 1995. *Cognate Objects and the Argument/Adjunct Distinction in English*. Doctoral dissertation, Northwestern University.

Massam, D. 1990. Cognate Objects as Thematic Subjects. *Canadian Journal of Linguistics* 35: 2, pp. 161-190.

Mittwoch, A. 1998. Cognate Objects as Reflections of Davidsonian Event Arguments. Rothstein, S.(eds.), *Events and Grammar*. Dordrecht: Kluwer. pp. 309-332.

中島平三・池内正幸. 2005.『明日に架ける生成文法』東京：開拓社.

Nakajima, H. 2006. Adverbial Cognate Objects. *Linguistic Inquiry* 37: 4, pp. 674-684.

大室剛志. 1990. 同族目的語構文の特異性.『英語教育』1990年11月号, pp. 74-77.

Pham, H. 1998. Cognate Objects in Vietnamese Transitive Verbs. *Toronto Working Papers in Linguistics* 17, pp. 227-246.

高見健一・久野暲. 2002.『日英語の自動詞構文』東京：研究社.